

魔法と僕等とネギま

レットスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界には異能者と魔法使いがいました。

そしてこの世界には人種だけではなくまたほかの種族がいました。

その種族は人と同じ肉体を得て人とクラス種族もいた。

ある少年は、立派な魔法使い夢を見る少年がいた。

またある少年は、英雄になるために生まれ持った悪魔の力を使い小さい頃から悪を殺

し続けた少年

またある少年は、全ての悲しみを背負いながら力を求め続け、7歳で世界を旅した少

年がいた。

またある少年は、仲間を守れる力を求め続ける少年がいた。

またある少年は、力を求め続け。

またある少年は、演技を磨き続けて。

す

またある少年は、速さを磨き続けて。

またある少年は、.....

バカテスとネギまのクロスとオリキャラ達の話が始まる

見たくな人バツクしてください

目次

プロローグく始まりく	1
2話 ただの話	5
この人に逆らつてはいけない	9
3 A	13
それからと組手	19

プロローグ～始まり～

僕はボロボロで死にかけの時に、僕が初めて護衛をして初めて「愛恋した” お姫様は、僕に魔眼をあたえ傷を治した。

何故なら彼女は……

「将斬、私を封印して」

殺してと言った。

何故なら、彼女は創生の魔法を司る者。その魔法は、全てを創り出すことができる魔法。人はそれを一なる魔法と言った。その魔法は、故に危険で魔力を使うだけでわなく人の生命力を奪いとると言われている。

何故それを彼女は使える？

それは、彼女は転生し繰り返してきたからだ。

彼女は前世からの記憶は無いが、それを使えることだけは知っていた。

そして彼もまた転生して繰り返してきた。記憶はないが。

「僕はできない!!君がすぎだか!」

「知ってるよ………私のためにそこまでしてくれたんだもの。でも私が生きてい

るとまた私を狙ってくる人達がいるの。創生の力がある限り平和になれない!!」

彼女は、涙を流しながら言った。

僕は彼女に近づき右手で僕の胸に顔を近づけさせた↑抱きついた

「それでも僕は、できない。平和なんていらぬ!君がいるなら僕は!」

「それでもほかの人が不幸になるのは嫌なの!将斬お願い。貴方の手で封印して欲しいの永久封印を!」

永久封印

その名のとおり

永遠に封印し続ける最強の封印魔法

その魔法を使えるのは大魔導並の魔力が必要

その時、僕は未来が見えた。彼女をこのまま生かせば僕は自分の手で彼女を殺す未来を!

「……………!!……………わかった。」

「将斬?」

僕はキスをした。

「!!んっ!／／／／」

「僕からのプレゼント!／／／／」

「ありが………とー！」

「綴る」

細い指先が虚空に光の軌跡を描き、太古の魔法文字を紡ぎ出す。

この街を封印し全てを永久に眠り続け、

彼女に光を視せ続けろ、

この指定、場所を結晶にして

全てを結晶とかせ。

全ての攻撃を跳ね返し永遠に結晶化せ！

これは、第五階梯闇術呪を唱えると光輝いて七星を中心になるように魔法陣が現れた

そして七星の体は宙を浮き粒子が現れ光り輝き始めたところで彼女の一言

「すごい第五階梯闇術を使えるなんて………ありがとう。私は貴方の心にもいつでもいる

からー！」

そう言つて彼女は結晶に包み込まれ封印された。

「それはすごいよ………」

カタコト、カタコト

誰かが歩いてこちらに來ている。そして大きな魔力を感じた。でも懐かしい魔力だった。

??? 「将斬、お前がこの封印魔法をしたのか……………?」

「うん。師匠。僕は、もつと強くなりたいたい！もう誰も失いために！」

俺は驚いた。6歳にして闇ギルドのマスターすら倒しただけでわなく超封印魔法をした少年に彼は戦慄した。

「ふん。いいだろ！俺の修行は厳しいぞ？」

「それでも僕は、強くなる！」

彼はそう言って倒れた

??? 「フツ。これだけの魔法を使ったんだ倒れない方がおかしい。そしてあの眼は……………まさかな？今起こしても可哀想だな。」

そう言って彼はこの街を出たあと声がした。

「ありがとう」

と声が聞こえた。

「フツ。まさかな？」

そう言って彼はこの街を異空間に飛ばした。

彼はこの後の修行で魔眼を重視した修行を始めた。

それから8年もたった。

2話 ただの話

あれから数年、マスターのどこから離れ仲間^{家族}と旅をした。

あれから色々あった。

ほんとに

でつ、今、俺は嫌、俺達は麻帆良学園にいたのだが何処ぞの妖怪の主ぬらりひよんみたいな爺さんと初めて見る妖怪、否、妖怪ババーが意味わからないと言った。

「妖か……学園長先生とクソ……校長先生何故今年から男女共学にしたのか教えもらいましよるか？」

彼、黒鬼夜深はそう言った。

「黒鬼くん、今妖怪と言いかけなかったかね？」

「いえ、そんなことは無いですよ学園長先生」

そう言つて彼はニコリと笑い堂々と言いかけた。

「あんた、その糞砂利どもとあたしのこと糞ババーとかと言いかけなかったかい？」
「辞めてください。これでも僕は生徒会長ですよ？」

「そうだったね。話を戻すとあたしと学園長の気まぐれさ」

そこで校一糞ババーは言った。

「気まぐれですか。わかりましたそれはそれは面白いので許します。糞ババーに妖怪ジ

ジー」

「アンタ失れーさね！」

「ほほほ」

学園長は苦笑し、校長は怒った？

「僕たちは失礼させてもらいます」

そう言つて僕等は外に出ようとしたら学園長が一人の人物に声をかけた。

「大和くん、君だけ少し話がある。大事なねっ。校長も席を外してくれ」

そう言つて皆出て行つた

「爺、俺によつて？」

彼、将斬は学園長《近衛 近右衛門》に聞いた。

学園長は真面目な顔で

「お見合いをしないかの？」

「よし、爺死ぬ覚悟はできてるんだな？」

「じよ、冗談にきまつてるじゃかいか」

そう言つて笑う学園長の手からお見合いの写真があつた

「爺苦しんで死ぬか、ギロチンで死ぬかさあ選べ？」

「待つんじゃない!? その選択肢じゃ全て死ぬしか選択肢しかないのじゃ！」

「冗談はよして俺に用件とは？」

「顔が笑つてないのじゃがのう？ 用件つて言うのは、木乃香の護衛をたのみたいのじゃ」

近衛木乃香

「この学園長の孫だ

「ちよと待て？ 爺、刹那が護衛にいるだろ？」

「もしもの為じゃ」

少し考え俺は答えた。

「良いが俺がいるクラスにはあいつらも入れて欲しい」

「わかつたすぐ手配しておこう」

出ようとした時

「内密にじゃぞぞ？」

息揃つて同じ言葉を言った。

学園長は驚いた。

何故なら息揃つて言うのは合図とかしないと無理なのに彼は

ドアノブに手をかけたまま言ったのじゃ。

そして彼は私を見て微笑みながら出て行った。

「お主は、全て見えていたのじゃな？」

儂は、誰もいない学園長室にポツリとは言った。

ピンポンパンポン

中等部の男女の皆さんは至急新校舎の体育館に集まって下さい！
繰り返します。

中等部の男女の皆さんは至急新校舎の体育館に集まって下さい！

ピンポンパンポン

「めんどくつゃい」

彼はそう言って体育館に向かった。

この人に逆らってはいけない

俺は学園長室から新校舎までに10分かかって到着した。

ガヤガヤ

五月蠅いなあ

何故ならこの時期（4月6日）に男女呼ばれる事は無いのだ

誰だつて騒ぐかと思つてしていると俺は、いつものメンバーのそこに向かった。

「よっ。」

「あつ、将斬君」

彼の名は、吉井明久

学園の問題児の一人、学園初の大・問題児

「将斬来るのが遅いじゃねーか」

彼の名は、坂本雄二

昔は神童と言われる程頭がよかつたが今では、悪鬼羅刹とまで言われている

学園の問題児の一人

「学園長とは何を話してたのじゃ？」

彼じよ……彼の名は、木下秀吉

彼は声帯模写が得意で自由に声真似ができ演技も得意

「……………気になる」

彼の名は、土屋康太

盗聴、盗撮が得意で彼の右に出る者はいない。

「ムツツリー二急に現れるなよ」

「……………すまない」

「てかさあ将、何で集められたかわかるか?」

彼の名は、神霸祐

素手で西村先生と渡り合うほどの強さを持っている。

「ああん? んつなもん知ってるに決まってんだろ?」

「しってんのかよ!?!」

彼の名は、那加島涼雅

超スナイパーと言われる程の射撃センスを持っている

「お前ら、うつせーなあ?」

彼の名は、田中達大

面倒な事には一切加担しないが面白ければ何でもすると言う矛盾だらけの男

将斬とは、付き合いが長い（家族を抜いて）

「よっ！達大、それに龍哉じゃん！久しぶりじゃねーか！」

「えっ!? 龍哉君!？」

「お前がああ龍哉か？」

「……………シャツターチャンス」

「ムツツリーニよ、今そこかの？」

「誰?」

敦也、涼雅、康太、雄二、秀吉は、初めてなのだ

「久しぶり！祐に明久！俺の名は西田龍哉だ！これからよろしくな！……………将斬

あれは、ええんか？無視しといて？」

彼の名は、西田龍哉

大阪出身となってる。

竜の血を持つ者で魔法協会では、英雄ジークフリートの生まれ変わりとも言われている

彼は頷いたそれから誠也がきてたむろっていると夜弥がステージに上がった

「えー、皆さんお静かに！」

夜弥は、ステージに立ちマイクで喋ったものの皆聞く気が無かったのかまだ少し五月

蠅い

「今すぐ黙れ！お前ら痛い目会いたいなら別に良いが」

彼は静かに喋った。

喋ってた男女静かになった。

「皆、真面目でよかつたよ。」

いや、脅しを使った貴方が言いますか？

「皆に話があるんだけど明日から男女共学になったから。拒否権は、君たちに一切無いから以上！」

生徒達がポカーンとなってるのも無視でステージを降りた

「夜弥君、職務乱用だよね!？」

「なんのことやら？」

駄目だこの人！

皆がそう思つたのだ

それから俺達のクラスはネギ先生のクラスに決まつた。

3A

朝何時もの様に起き朝食をとり学校に向かった。

男子 said

「すいませんが皆さんはココにいてください」

そう言つてネギ先生は、3—Aの教室に入つていった。

「10歳の先生つて大丈夫なのかなあ？」

そう明久がい言つた

「お前は、馬鹿か？」

「雄二の言うとうりじゃぞ明久」

そして皆がうなずいた。

「みんなに馬鹿にされた!!」

「雄二、この馬鹿に説明頼む」

「明久簡単に言うなら天才少年だつ」

雄二それは、訳しすぎじゃ…

「なるほど!!」

やっぱり明久は、バカだった。

『皆さん入ってきてください!』

僕以外の皆は、頷き

ネギ先生の声がしたので扉を蹴飛ばした。

「オラツよ!」

そう言つて将軌は、扉を蹴った。

そしてその扉はネギ・スピリンググフィールドにあたった。

「ぐはっ!」

「「ネギ先生!!」」

クラス的女子全員が声をそろえていった。

「誰ですの!?!扉を私のネギ先生にぶつけたのわ!!」

「ゴメンアソバセ笑」

「誰ですの!!」

「俺の名前は 大和将軌 以後よろしくな!」

そう言つて雪広あやかとにらみ合っている将軌

続いて

「俺は、神覇祐以後よろしくな！」

「俺は、坂本雄二だ」

「ワシは、木下秀吉じゃ。こう見えても性別は男じゃ！」

秀吉の言葉に皆ええつてなつた。

「僕の名前は、吉井明久よろしくね！」

馬鹿が増えた気がしますわと何処からか聞こえた気がする

.....

.....

.....

.....

自己紹介が終わつてネギ先生が復活して

授業が終わる

皆、下校しようとしていたら、ネギ先生がやつて来た。

「男子の皆さんすいませんが、女子寮に行つてもらえないでしょうか？」

「……」

「どうする?」

「そうだなあ?」

「あれはどうだ?」

「あれか」

ひそひそ物騒な事を話す男子たち。

「すいません。ネギ坊主。なぜ僕たちが女子寮に行かねばならないのか教えてもらえませんか?」

おいおい夜深本性が現れてるぞ?

ネギの話が終わり

女子寮を案内され各自の部屋に解散になった。

俺と祐は、部屋の札を見ると

宮崎のどか 綾瀬夕映

大和将軌 神霸祐

と書かれていた。

「あの糞妖怪と糞ババアアア!!」

殺意がこもったが仕方ない部屋なしは辛いので俺たちは、部屋に入っていると誰もいなかった。

「誰も帰ってねーのか？」

「みたいだな？」

まいいかあ

そう言いながら自分達のベッドに荷物を置き俺は冷蔵庫に何が無いのか見た

「祐、少し買い物出るけどお前どうする？」

「俺は、ランニングしてくるわ。」

そう言って二人は外にでった

それから俺は、30分買い物をし、寮に帰り扉を開いて部屋に入ると宮崎のどかがい

た。

「・・・」

「ただいま」

「キヤアアアア!!」

俺の言葉でわれに返ったのどかが悲鳴を上げたのだ。

それからと組手

なぜ帰っては悲鳴をあげなければならぬ。

そしてなぜ俺達は女性陣に囲まれてるのか

それは、女子寮に男がいるからだ

それはそうだろう誰だって驚くだろうな

でもさあ、俺達は悪くないじゃんあのじじいや妖怪ババアが悪いじゃん本人達に言っていないのが

見てみる、明久なんか動体縛りあげられて逆さまに吊らされてるんだから。

「ちよつと待つてよ僕悪いことしてないのなんで吊るされてるの!?!」

そこで雄二が

「明久、お前は悪くない。悪いのはあのクソ妖怪ババアだ。

それとお前らそろそろ話を聞いてくれないか?」

そう言うとき委員長が

「話を聞くつてですつて?まず貴方達は謝ることを知らないのですか?それと…」

そこで将斬が委員長の話遮る。

「委員長まず俺達が帰つて来る頃には札には、俺たちの名前があつたし、まず縄を解けよ？ 対等に話をするならそれぐらいはしろ？ 後は俺達が悪いから謝れだ？ お前……」

そこでさつきまでいなかつた祐が割り込んできた。

「将、そこまでだ」

続いて夜弥が

「お前達いい加減にしろ。将斬も委員長もいい加減にしろ。明久を下ろしてやれ。」

その一言で皆は明久を下ろしてこの場から解散となつた。

「委員長さつきは悪かつた言い過ぎた」

「それは私もです。ごめんなさい。」

「また明日」

そう言つて2人は仲直りした。

それから数日がたった。

「なあ祐久々組手しない？」

「いきなりだなおい?!」

「暇だもの」

「将斬君はいつも急だよ？いつも思いついたら行動するから僕達のみにもなって欲しいよ!？」

そう言つて明久と祐は、突つ込んだ。

「でも今更だよな（笑）」

雄二はそう言つて康太、秀吉、龍也、達大、涼雅、夜弥は頷いた

確かにそうかも知ないっつも俺の思いつきでやってるがこいつらいつか痛い目あわせと考えてる将斬だった。

それから僕達は誰もいない山奥の広場に着いた。

最初に戦いをするのは僕（明久）と龍也君になった

「明久、久々にやるからつて手加減とか考えてないよな？」

「龍也君相手に手加減できるわけないよ。それに、僕もどれだけ龍也君が強くなったのか、僕がどれだけ強くなったのか確かめたいから本気で行くよ！龍也君も本気できてよ！」

「あたりまえだろ！本気でやるにきまつてんだろ！」

心配はこの中でデタラメな祐君がする事になった。

森の半径一キロは将斬君のオリジナルの魔法結界で祐君の適当パンチでも壊せない

レベルの強度だ！

「適当パンチって？それはあれだよ？今は秘密という事で（笑）
「それじゃ、2人とも用意はいいか？」

そう言って祐君は2人の顔を見て言って僕達は頷いた